令和２年度　厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
思春期・若年成人（ＡＹＡ）世代がん患者の包括的ケア提供体制の構築に関する研究
分担研究報告書

ＡＹＡ支援チームのモデル作成に関する研究

研究分担者　鈴木 達也　　国立研究開発法人 国立がん研究センター中央病院 血液腫瘍科 医長

研究要旨：　ＡＹＡ世代のがん患者の治療、就学、就労、生殖機能温存等に関する支援のため、院内横断的に活動する「ＡＹＡサポートチーム」に参加する部門を拡充し、スクリーニングシート「困りごとを見落とさないためのツール」を用いて、ＡＹＡ世代の患者の困りごとや悩み等を早期に把握し、院内の支援体制につなげる活動を強化した。また、特定の領域については、ＡＹＡサポートチームが院内勉強会等を通じて、院内スタッフへの啓発及び支援体制の周知を行って、各部署からの支援依頼の拡充を図った。一方、生殖医療機関との医療連携会議を基盤として、多施設が参加する勉強会を開催し、近隣地域でＡＹＡ世代の診療・支援に携わる医療者の研鑽及び医療連携の強化につながった。本研究での取組は、ＡＹＡ世代の患者支援にかかる地域モデル構築に向けた取組の一例としての有用性が示唆された。

Ａ．研究目的

国立がん研究センター中央病院は、平成 27（2015）年度にＡＹＡ世代を支援する多職種診療チームを発足させ、悩みのスクリーニングや生殖機能温存に関する支援を行ってきた。

平成 30（2018）年 3 月に閣議決定された第 3 期がん対策推進基本計画（以下、「基本計画」という。）には、ＡＹＡ世代のがん対策として取り組むべき施策のなかに、「ＡＹＡ世代の多様なニーズに応じた情報提供や、相談支援・就労支援を実施できる体制の整備」や「治療に伴う生殖機能等への影響など、世代に応じた問題について、医療従事者が患者に対して治療前に正確な情報提供を行い、必要に応じて、適切な生殖医療を専門とする施設に紹介できるための体制」の構築等が盛り込まれている。

基本計画を踏まえて、院内横断的なＡＹＡ世代支援チームの体制を充実させるとともに、地域の医療機関との活動を通じて、地域におけるＡＹＡ世代支援のネットワーク形成に向けた取組強化を目的とする。

Ｂ．研究方法

ＡＹＡ世代のがん患者に対して、院内の各部門で対応するために導入した「困りごとを見落とさないためのツール」の活用により、病棟、外来、通院治療センター等の各部署において、ＡＹＡ世代のがん患者に対して、標準的な対応を展開するとともに、院内横断的な検討会を定期的に開催し、ＡＹＡ世代支援チームへの多職種の参画、各病棟や病院内の各部門との連携のあり方、他医療機関や院外リソースとの連携等、支援チームに求められる機能や構成について検討を行った。

生殖医療の連携のために立ち上げた連携会議を複数の施設が参加できるように拡充して、地域でのＡＹＡ世代支援モデルの共有、発展を視野に入れた試行的な取組を進めた。

（倫理面への配慮）
該当せず

Ｃ．研究結果

院内のＡＹＡ世代の患者を支援する「ＡＹＡサポートチーム」には、患者サポートセンターを中心に、各診療科、病棟部門、外来部門、薬剤部、栄養管理室、地域医療連携部、リハビリテーション科、がん相談支援センター等の参加により、院内横断的な活動を展開した。

ＡＹＡ世代の困りごとや悩み等のスクリーニングを行うために、電子カルテに搭載したスクリーニングシートを用いた対応を、院内 9 病棟のほか、血液腫瘍科外来、通院治療センター等の外来部門で活用し、令和 2（2020）年 4 月から令和 3（2021）年 3 月までに、のべ 1177 件のスクリーニングを行い、ＡＹＡ世代のがん患者の状況把握をおこなった。

本年度は、ＡＹＡサポートチームが活動を強化する領域をチーム内で共有し、それぞれの活動の強化と連携を図った。例として、同世代の患者が集まって交流や情報交換を行う「ＡＹＡひろば」、妊孕性温存等のがん・生殖医療における意思決定支援、就労支援・両立支援、就学支援等の思春期世代への支援、未成年のこどものいるがん患者・家族への支援、原疾患及び治療によって起きる外見の変化に対する「アピアランスケア」等の活動について、チーム内で情報共有するとともに、スクリーニングシートの情報に応じて、それぞれの支援活動につなぐ取組を強化した。

がん・生殖医療の領域では、がん専門病院と生殖医療施設の円滑な医療連携モデルとして立ち上げた連携会議に加えて、地域でＡＹＡ世代のがん患者の治療・支援に携わる医療機関が参加する多施設勉強会を新たに開始し、生殖医療に関する専門的知識や意思決定支援の対応に関して、施設を越えた多職種間での共有に向けた取組につながった。

Ｄ．考察

罹患する患者数が少なく、疾患の専門性や個別性の高いＡＹＡ世代の患者支援においては、多職種による院内専門支援チームが中心となり、院内活動をリードすることが有用であった。そのためには、スクリーニングシートの活用や定期会議を通じた、スタッフ間の情報共有によって、ＡＹＡサポートチーム全体に知識と経験を蓄積する取組や仕組みが重要であると考えられた。

また、地域でのＡＹＡ世代支援モデル構築のためには、特定の課題やテーマに応じた専門的知識や支援等を共有できる枠組みを構築して、他のテーマに応じた活動に拡充させることで、地域のＡＹＡ支援モデルに発展する可能性が示唆された。

Ｅ．結論

院内のＡＹＡサポートチームの活動を通じて、ＡＹＡ世代がん患者の支援に関する知識や経験を、院内で共有、蓄積するとともに、地域での医療連携会議や勉強会等の取組を通じて、地域でのＡＹＡ世代がん患者の支援についての啓発を行うとともに、支援に関する知識や経験を共有、蓄積する仕組みの構築が重要である。

Ｆ．健康危険情報

なし

Ｇ．研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

1) 鈴木達也. 国立高度専門医療研究センター（ナショナルセンター）の新たな取組. 【シンポジウム2-6】第3回AYAがんの医療と支援のあり方研究会学術集会. 2021年3月（WEB開催）
2) 平山貴敏、小嶋リベカ、岸田徹、宇田川涼子、柳井優子、小川祐子、田中萌子、増子侑希、石木寛人、鈴木達也、里見絵理子. オンラインコミュニケーションツールを活用したAYA世代がんサバイバーのピアサポート「オンラインAYAひろば」の取り組み. 【P4-3】第3回AYAがんの医療と支援のあり方研究会学術集会. 2021年3月（WEB開催）
3) 平山貴敏、柳井優子、石木寛人、新藤明絵、田中萌子、小林智美、小嶋リベカ、森文子、鈴木達也、里見絵理子. 国内のAYA世代がん患者を対象とした支援ニーズを把握するためのスクリーニングツールの開発. 第18回日本臨床腫瘍学会学術集会. 2021年2月（WEB開催）
4) 鈴木達也. 国立がん研究センター中央病院でのがん・生殖医療の取組について～血液内科の視点からおよび行政の経験を交えて～【OCjpn Meeting 2021】第11回日本がん・生殖医療学会学術集会. 2021年2月（WEB開催）
5) 稲村直子、齋藤美和子、池長奈美、藤井恵美、森文子、野口瑛美、鈴木達也、加藤友康. 妊孕性温存の意思決定に影響する因子の検討. 【P-71】第11回日本がん・生殖医療学会学術集会. 2021年2月（WEB開催）

3. 政策提言

なし

Ｈ．知的財産権の出願・登録状況
（予定を含む。）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし